

モスクワからカザンへ—辺境から見た「ロシア」の風景

桜間瑛（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程）

2009年9月10日から20日にかけての11日間、実に2000キロ弱に及ぶ、ヴォルガ中流域の旅が行われた。筆者は2008年の9月より、この旅の折り返し地点でもあるカザン市に留学しており、一行がモスクワに到着した翌日11日の朝に合流し、行動を共にした。

今回の旅行には、ロシアの専門家のみならず、中国をご専門とする武田雅哉先生、インドをご専門とする井上貴子先生・杉本良男先生も参加され、バラエティに富んだ構成となった。

筆者自身は、すでにロシアでの生活が1年以上に及び、それ以前にもいくどかロシアを訪問した経験がある。しかし、毎回の滞在先はもっぱらモスクワとカザン及びその周辺であり、今回の前半の旅程に含まれた諸都市は、筆者自身にも、新鮮な印象を残した。また、そうした印象は、ロシア・ヴォルガの広大さというものを改めて感じさせるとともに、自らのフィールドであるカザン・沿ヴォルガ中流域の諸民族共和国の独自性を再確認させてもくれた。この小論では、カザンを拠点に研究しているものの視点から、今回の旅行で感じた「ロシア」の現在の在り方について簡単に述べたい。

まず旅程とは順序が入れ替わることになるが、先に筆者が現在滞在しているカザンの概要を簡単に紹介しよう¹。モスクワから東におよそ800キロ、ヴォルガ河畔に位置し、タタールスタン共和国の首都をなす100万を超える人口を擁する町である。2013年のユニバーシアードの誘致に成功するなど、国際的な認知を高めることも目指している。同時にこの町は、連邦内でロシア人に次ぐ人口を誇るタタール人の都としての位置も占めている。

カザン、およびタタールスタン共和国の半数を占めるタタール人は、テュルク系の言語を有しており、その大半はムスリムである。タタールスタン政府は、それとロシア人・正教文化の共存を政策的な柱としており、積極的に多民族・多宗教共存の場として自身を喧伝している。実際に、町の公共放送などではロシア語・タタール語の2言語使用が徹底されている。カザン・クレムリンでは、2つの宗教の平和的共存の象徴として、モスクと正教寺院が対になって置かれている。

こうした光景は、筆者にとってもはや見慣れたものとなっており、一種の自分にとって

¹ カザンの全体的な概要については、北海道中央ユーラシア研究会 HP にアップされている筆者の滞在記 (src-h.slav.hokudai.ac.jp/casia/09sakurama.pdf) も併読されたい。

のロシアでの日常の光景になっていた。それゆえに、特に今回の旅行の前半で見た光景は、筆者に軽いショックを覚えさせるとともに、「ロシア」というものに対する認識を再確認させるに十分であった。

モスクワを出発し、一行が向かったのは、北東におよそ 170 キロの町ウラジーミルであった。ここは、人口 30 万人強という中規模の町で、モスクワの喧騒とは離れた、落ち着いた雰囲気醸し出している。と同時に、ここはロシアの古都の一つとしていわゆる黄金の環の一つともなっている。

町の中心には、黄金の門が鎮座し、その威容を示している。さらにそれをくぐって進んで行くと、かつてクレムリンのあった敷地に、多くの正教寺院がたたずんでいる。そこには、この町の歴史と分かちがたく結びついたものとしての、正教の位置づけが強烈な印象とともに表現されていた。

そうした印象は、翌日に訪れたスズダリで、一層確固たるものとなった。ここも、現在の人口は 1 万人強という小さな町ながら、1000 年近い歴史を持つ古都として、やはり黄金の環の重要な一角をなしている。

現在、観光をおもな生業としているだけあって、小さな町ながらも大都市の雑然としたものとはまた違った賑々しさが覆っている。観光業の中心を担っているのが、壮大な教会・博物館群である。その巨大な外壁や空にそそり立つ尖塔は、町自体の小ささにもかかわらず、見る者を圧倒する迫力があつた。また博物館の中にはきらびやかなイコンなどが並び、その持っていた権威の大きさを誇示している。ロシア中世の農村を再現したという木造建築博物公園でも、やはり最初にその姿を表すのは木造寺院であり、中心には正教があるということを否応なしに実感させられる。

さらに、この後に訪れたボゴリューボヴォ、ゴロホヴェツでも、中心をなしているのは、町を見渡す巨大な修道院、寺院である。いわば、寺院をとりまく形で町が作られている。ゴロホヴェツは、中世以来のロシアの町の様子を保存していると言われるが、そうであるならば、これはまさに教会と一体としての、ロシアの町の在り方が如実に表わされていると言えよう。

また、こうした正教寺院などには、アレクサンドル・ネフスキーや、ユーリー・ドルゴルーキーといった、ロシアの歴史上の偉人たちがその功績を讃えられ、顕彰されていることも見逃せない。そこには、ロシアの歴史そのものが、ロシア正教の発展・拡大と不可分なものとして存在していることを明確に示している。

もちろん、今回訪れた諸都市は、由緒のある、ロシアの歴史・正教の歴史をことさらに強調した町であることは間違いない。しかし、そうした町に熱い視線が注がれ、その復興に力が注がれていることも確かである。2005年に制定された11月4日の「国民統合の日」という祝日は、正教のカザン生神女祭りとなっており、今年（2009年）連邦大統領のメドヴェージェフはこの日をまさにスズダリの小聖堂落成式への出席に充てた。ロシアで4番目の人口を擁するニジニ・ノヴゴロドのような大都市でも、我々の遭遇したガイドや博物館の案内員が、あふれんばかりの正教・郷土への愛を示したことは、決してこうした傾向と無縁ではあるまい。

こうした正教と不可分のものとしての、町及び歴史のあり方は、カザンに住んでいる自分から見て、頭ではわかっていたつもりでも、改めて目の当たりにすると、新鮮な印象すら与えた。と同時に、その歴史はこれらの町にとって、勃興・発展の歴史であるのに対し、カザンのタタールやその他の非ロシア人諸民族から見ると、ロシアによる侵略の歴史に他ならない、ということも頭をよぎる。

カザンにも、イヴァン雷帝による制圧の際の軍勢を弔った寺院はある。しかし、それは現在カザンカ川に水没しかかっており、修繕もままならないまま放置されている。そもそも、下手にこの歴史に触れること自体が、カザンでは一種のタブーのようなものである。今年も、『タタール民族の解放戦争』と題した本が、タタール人とロシア人の対立を煽るものとして、議論を呼んだ。実際、タタルスタン政府は懸命に平和共存を強調するものの、タタール人の口からロシア人・ロシア正教への嫌悪感とまではいかないまでも、距離感・忌避感を覚えさせる言葉を聞くことは珍しいことではない。

これらは、まさに歴史が生きたものであり、かつまた現在も作り出されつつある、ということを表している。そこから、正教・ロシアを全面に押し出して進められているナショナリズムの醸成が実感されるとともに、それと対立しない程度に、自らの歴史・尊厳の回復を目指すタタール人を始めとする非ロシア人諸民族・およびそれを抱える民族共和国の困難な状況、ということも、改めて浮き彫りになったように思う。こうした経験は、今後の自身の研究を進めるに当たっても、一つの参照項としての価値を持つであろう。

今回の旅行で心残りな点は、肝心のヴォルガ川自体に触れる機会が極めて限られた点であろうか。特にその河畔の景観の多様性といったものに目を向けることができなかつたのは、残念でならない。

まだ1年弱の滞在予定を残している筆者であるが、こうした機会がなければ、モスクワ・

カザンを除いた「ヨーロッパ」ロシアの諸都市を回るような機会はなかったであろう。その意味で、この旅行に誘っていただいた望月哲男先生、高橋沙奈美さんには、この場を借りて改めてお礼申し上げたい。